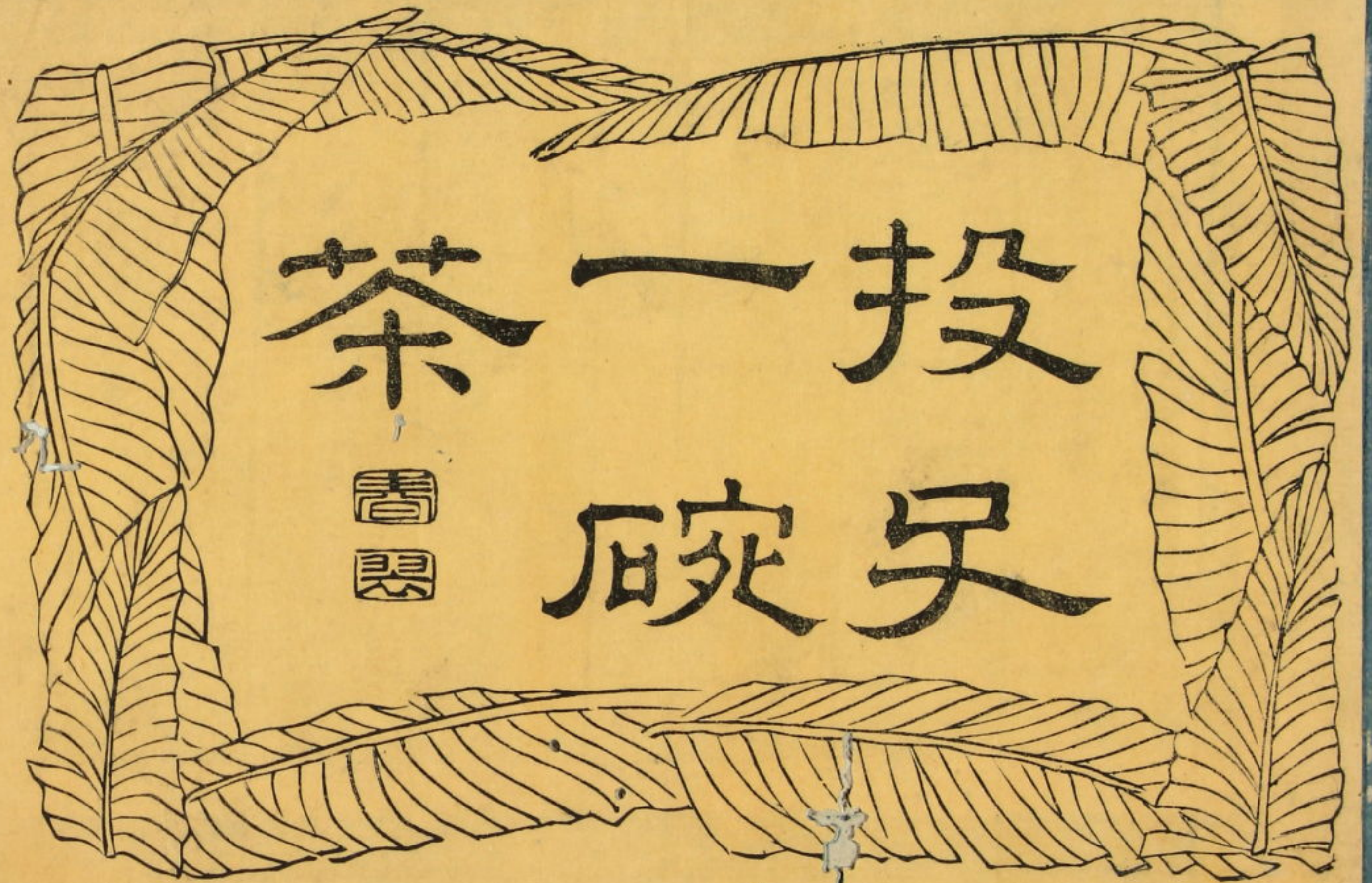


貞享式海印録

癸卯 脇法
三
三





自序



吾翁も免道を以て受てて安んず
 中流のみきくく浪速乃一婦も採
 仰とて採て深川の林多し深し多し
 揚とあひ服とさきやう或とき松藏を
 抑て法句經を関し本林社及弟像
 一法之所印言一法所謂一心也是以昂
 攝一切を留出世間法即是一法界大總
 お法門體唯依安会而有善あ若
 駐まると唯一真如故言海印三昧也
 とくをんを汲り移りて濁りて意徳の
 古奥浅拂ひ更めり法をるる要の正凡
 と起りて後なる法判極ありて人の



佛子傳く母はこれと云ふもあはれは乃
高きつらよ遠きぬを考く生かの月を
照して字く海印の集を添うたあり
舟楫舞と見うを条よあてたきを
二三子に傳ふを其の事一理万南の
確諦あれを之と伸る付を乾押子
つらつ其の月日早う見より風よあひ
くやてあま交る雪秋の木杵は表言
まの突きの雲ある四時の朗詠山おは
奇観神解あれを應答事あり人皆
一と乃玉樂衣食足財日用の事又
字てあま波の被るあると云ふの成乃及
りよみとらこや濱の真砂い子ひ海は

海をまのたれは法方よあまをんくふ
拾字して表遠くの鑑とつらと照し
あもてたれつらと挑事安は貞事武
海印録と号く人そく安を海乃
観をあして蒼蒼の海印中ふんを
隆るを彼らよ其の波風あつら
あまいつら世に逆のゆる祀法のかまみの
お列年其の帝とも頼るを湘北
花もろらあられいと云風復古の形を
新て同じ家はたもやと四方の風土茂
りまふよその肉南鼓の浦人
あぬよ未弥生 也る也

二

元 花は持たせしそ友春 イセ

蓮 何とあはれやう不と梅のむ 三ノ入リ

梅 花ももよふ春のあけり ま

拾遺 牡丹もよふ 阿多良之西 全出

奉天 只る木もやに月の梅あり 上二

根雲 海きのう梅のう 水車 百・口戸

野の鳥 口の春さすうの梅のあけり 初唐 巻故

拾 久くやアめく初はる 二

一橋 花はてち梅を禁う 二

幕 梅の梅をたす西日 うん

四

白梅 時秋 江戸梅は阿多良 上白梅

拾 冬も事人さうの市乃梅 未

孫雲 ねん人とあふもれ初 うれ

相違 又もやさむ雪の雪 ま・スリ

尚 糸もいすく 阿多良の園 を

枕白 花の行て書えまゝの梅衣 を

五

令 風乃ききさす子よいあそ 山 未松白

雪毛 塵寺かきも梅一房のむ を

冬園 梅りや梅の比乃梅 を

拾 梅松も人あふし うの雪

化 何の来乃むもあれぬ白 うか

一橋 紙のぬもをむむ む

仙 びつ白のうと 祇 を

甚 甚他の中よのむ 交り

拾 初秋や梅も梅田の 一

秋白 粟ひえさくもあす 梅の梅

之 祿元 辰九月改 阿多良 を

カ 白梅もよふ 阿多良

梅 月出そり 阿多良

あ 丁も梅も 阿多良

拾 花も梅も 阿多良

梅 花も梅も 阿多良

之まわら又補む其字は流忍のの字を加す
 されいし河平之吳又あむむるの字をく
 門人書・おまふ表・夕越奇・カカ偶・長・長考・合辰合

歌二五 去日 カニ 歌人

三才一橋、十伎風 新山家 カ一キ角
 四知 猪妻 合七 角 進家 百三、

三午 ひき、三珠碩 卷指、六 角
 之辰 張の系 カ五不ト・巨あ、 カ九為号

四未 野集 合七 角 知辰集、三北枝
 五申 源 二辛酉堂 行拂炭、五涼菟

六丙 柳実、二辛兀峯 藤秀 合四 角
 七脚 炭 百一之世故 白兒 カ九、

八亥 笈 カ八 考 後振 カ云如行
 九子 小文 カニ史部 匂 七リホ

十丑 台向 百五柳リ 匂 七リホ
 十一 我白句、一 考 小弓 カ土東響

十二 西集 方共、 小弓 カ土東響
 十三 多却 カ五芙蓉 張有、五 化

十四 柳のさ、四三惟 條橋、一乙孝
 十五 東集 方共 考 皮去指、七 菟

十六 極山伏 百二、 一幅
 十七 文、葛 カ四杉風

十八 柳表紙 合七 吾仲 集屋琴 柳 角
 十九 ソノ巻 加一 万子 附水門 拾四 十丈

二十 夫未 高ノ粒 百一 宇中 上テシモ 合七 月尋
 百力仙 カ五 天垂 浪化言 百一 考

カイ印口

十

終末より其名の残るるもの煙の如き名残は其
 の但初及ある名残は其の如き名残は其の如
 の海にあり居る海に居る名残は其の如き
 一長短あり付句の中を隔りて其の如き
 又部分より或る三去上ありて其の如き
 皆三去の傍に其の中より二去に去の句あり
 あり二に二と下寸面去より其の如き
 一注の中より「」の限あるは又の傍より。△△□ある
 も要文又其余の如く其の如きなり
 一凡二去の如き其の如き三去の如き其の如き
 おまわりの句より其の如き三去の如き其の如き
 句より八おまわりの句より其の如き其の如き
 一若より其の如きの傍に出る其の如きの古式を字
 傳におまわりの句より其の如きの今上上の便
 一は其の如きを披華して其の中海印録は
 其の如きを其の如きなり

貞享式海印録一 曲齋 述

□ 教句は切字の道理あるなり

一 國布句の切字といふは其の如きの如き
 ある布句といふ人の切めは其の如き其の如き
 一 朝あつたる候の内は句の上より其の如きを隔りて
 傳云ふお二と始てお對する候に二と下り其の如きを
 起り其の如きと成て其の如きを傳ふるなり

一 切字の用といふは其の如き其の如きの如き
 是を其の如きを以ておを二ツとする候は始あり終
 ありて二句一素の布句といふなり

一 切字は古來候其の如き其の如きの如き其の如きを
 裁きしるなり其の如きの中詞傳て其の如きの余候を
 含む如きなり其の如きを以て其の如きの文字あり凡
 倍云もて其の如き其の如きを其の如きを其の如きを
 情に包て十七云ふ其の如き其の如きを其の如きを

二 歌のよき余情も世言わかく十七字は
 るまゝもむきまふとより愛を仮令切ま
 る布句とよもの切ぬ時ふ句よあすも依切ま
 のころは物もまふ子の法も多るれもおれはそ
 へまの早業し時おれは縁もさるもあまをさ
 鈴屋おのむ寝れてより今も初乃山さるわら
 とも独千代の古たよ分入へき時代と成ま
 只琴を侍うし世も依法平話の佛社と和舟
 の辞仮名をい世用のお好とよ人もあはは新
 る之佛社のまゝとねれとよも時節のあやの
 むれい須臾もさあま言たあす持神の法園
 せまゝ其の幸もふ理と聞まといと悔し
 と思起してせらふんくへまゝまゝ

△布句像やうの事

本布句を屍風の直と名ふし一已う句を作て目
 を閉て直に流て見る時死活自あらまゝわこ

此の如しは身を先して情を後ますとしか
 初てやう付句ともは目を閉てみけ眼おま
 たりんまをてするん又ぬまの推考とん

△六段の次第

此の如しは眼界は只今の姿を浮てまを又使し作
 きるなるその心乃古くぬとく又句は只日は秋
 家守の目をさく時唐言鬼のおおはまゝ
 件の舟乃指のと昔より言傳上まのわ句の物
 成て一字も只今の姿の足すかくも人のせ
 切の切屑をた集て上まの理にたま及
 △六段老傷心切く依あまは種とのんは
 持たき業抄三母子おまゝまゝ

△巻改り

百句の巻改りたるまふ才一之平句は延
 句あつたはる足高まゝくはる大物の位
 巻改りまゝ平句は士卒の傷あつたは
 延て又用ま

立守跡目世おろし取合物と書く一紙中より
知る白ひききりて皆古しとやきれり

根株 涼しきの凝碎るる水車 清風

新 日乃よをさすま智の虫か キ角

橋山 山伏乃ひりりも山さくろ 許二

夕 夕のを降るもきり ねもあ 甚三

難 中もちりまは備や橋くりり ワ吉

智 風乃一日吹てきりよりり 固友

杜吉 先きや各及り杜の花 木因

山計 名月の中ふひくや秀門 音吹

春山 春をさむ昔の下ある世は 杜行

三平 柳くま逢ぬ乃の岐うあ 文葉

八橋 号中吉翁風船乃 杉色 杉風

▲生守前後のしり百句百句白木勢のまはり
よりて大おの撰あしり一若百詩のまはり千
詩をばも只耳止守是うむ

□ 脇乃る

本撰 撰いあつりし句まそとむと先初心のまね
まて定字のふむむおんまのなも 孫も 善の草
おれて撰の目をまぬははひの始て他社の意味を
見し人の他社の名目終りしと感言せりこれ
一撰を与られて撰の目をまぬははひの始て
口きの件とあれい句ま辞の詮交りあしとくくみ
撰いあひの金唐糸色の面白くも撰はせ七撰の柄
おろし 撰のふはあに 口付 不白のあは位りて撰を
まのこの位あれい 巳の心を也てまのこま抄くも
山川草木の一字二字の風情を加てあ余情をそ
すまは撰も撰のまよりてああも撰をばし
▲[正] まのこの名もあつりやまの草おれ撰のまの
ぬもトアリ [三] 撰いあひの通るを考る 韻の方先撰りて
あは再撰もあつりはり終りは方草の姿より
あはヨリモ目をまぬははひ終りてくくきり

偶々揚子句まといふ中必七カ一の強をいふ限り付
意の対するまをいふ揚子句の始るふあれい處を辞
よくあつたけりその振へ成て二句と令らぬあま
字つて曲といはけりま草は情と対し是字意對
して句字怪あるあは辞曲苦う付とく

▲句まハ古風ハ口まの曲字をいふ傳世の名目ハ指
其名を借用して句の規をま教す服字行傳のや
せれり是を傳し意の對する字をいふ其あま
古風ハまあまの句を依て意の違ふあま用とる
多かれ又よりて西美ハ少分るるありさく
辞曲ハるまハ下下辭ハる体あれも未末ト
云余す辭して曲ハ大方違付マハ口マ
あませまの付い意余て平句のまある句あり
律句の中ハハハの中を分置たり

口傳能のまハ太文をいふ揚子語但言まあるま
太文を言ふまわを揚子語をいふ又世ハ

おむあの手わ口まの言まの付らむとんはこれと
揚子句わ句の客位揚子句ま位といふ句情の中
奉巻され客と成て其目の音典を口まの守まの形理い
何れあむんは能通て區わまぬ良あり一句ハ
んを余ま起まの風情を言まハんあ守ま
あまのんま口まを推して其好まは
客のまあれまをいふまはむ口まのんは

▲本まハ自柄ハハわ句の字ハ太文をいふ揚子語
已の情を作らむより揚答祝進喜ホの口まハ主客
向合候候するま自他を合らむ柄ま揚子
あ守揚答ハ互に挨拶句するまあれ揚子
揚子ハ一方の句ハ揚子ハその揚答とて
各字を口まハて返答するんとも其兼之揚子
揚子ハ口まハて二人とするん名あれい各
揚子ハ口まハて二人とするん名あれい各
扱て系色揚子人品言語の姿をま句まの自句ハ

作て付纏る事こそ二句合する時二件と成放す時
おとしあらしんはけは換投句より文あり他人の
搦すも作意ある事也換投の意いあるをこそ
つきまゝて尺の巾とス々々と懸る包物を祝美
去産あることとく若く包紙口上りて巾中の
品おれは搦者のまはら時二変して包紙口上の
あきあき只其品おを敷ふと一又信花の止んま
係投するも今一件にて般き巾とすんといはれ
山川草木の風情を加よはり ちと祖初始てまひ
法あれ古風とい遠より 不謂矢門にてお對搦は
爰に搦る身柄の事と申す古枕の名残をさる
う搦の門に入あらしも通る身柄搦り人のあを
着い係の造て智すた御世に許されもあれは
宜あるを撰て徳とせよ下二奉る 〇の句に
搦作あすと仮し作設て其惑をなく産草の口さ
く 〇の中二三云をせよ二件ある時方の下と

さうあらし 御の件を口さる事も取あらしむ
りをた教の節にて尺一件は搦て懐てむる
と字老の字とする 下二奉る

〇の句に三月は後三季あらし 搦りて其月を定むア
素物去来果也の口さる 柄は産の枝乃乃とす
とをば柄は二月のりきと評し 〇の句

柄は正月は後三季あらし 搦りて其月を定むア
季の用方定むて自知し 〇の句

〇の句に 賈換投 返名懐 記行移 徒候 魚お
神祇尺敷 恋賛 於 若 古 実 古 昇 取 格
右 左 振 の 旗 帯 式 衣 多 凡 月 の 梅 雨 と 梅 雨
△はれ 廻り 情 を 許 する 其 深 の 云 たる 其 敷
楊 虫 の 保 て 助 故 之 を 搦 付 時 其 云 たる
平 白 け 之 を 姿 を 保 て 禰 する 搦 乃 不 詮 今 爰
と あり 流 俗 には 駄 敷 を 寺 九 は 早 あり 〇
搦 して 情 巾 を 姿 あり 仕 立 事 せん 又 爰 の

花も風月も白く自解は独りこれ一糸を
添て白の位をすり上るを操の位とす

△湯砂

色も乃名も終り去の草 疎破

おきて操の目をそへぬる 翁

か白い秘乃の終を向きと操者口、草の白く見立き
の草乃終を扇匠ふ何ありと何ふ人ふありと若
竹の上をひくく秘乃を操く又操いこと思ふこ
尚も思ふは草ありやと止むとするもつと行き
草も強れてもつと立ち上り是又終を自乃の密
こと思えておきて操の十六付より今是を圓圓付と
思ふお白い去の疾虫の終を思ふ情の白く思ふ
云々ぬおありて平白くをきを思ふだふれを操
と定草も打きてと何をうみ操を合て白の
姿と成さる故にたふしあつとも扇乃り去の竹
ト密情備る白くは仕立事すらう一云けりきと

「ついでにさう目の目をさしぬ」

とする時いつお杖の扇とありお人の柄の柄もあて
去草の姿もさし平白くは唐入柄の両陰を思ふも本
こ白くを操は操もつて竹葉笛辞苗のた乃く
あ守から操投る情を許すおあつた乃ては其の
情もあつては柄もあつたうれは又感せぬおはは
二三子も遠洲へつり唐門の柄もあつた乃ては柄
もあつたあつてはあつた白く通ひ定草のふもあ
ぬおさした今も古風もあつた乃ては白く

「とこそ操くも産むやの葉」

操へやうて あけあけの 空

あつて自他種運の初をかき及の深さを向きと若
弟我て白の姿もあつた乃ては其の柄もあつた乃
我も及も柄もあつた乃ては其の柄もあつた乃て
乃て人もあつた乃ては其の柄もあつた乃ては其
の辭文もあつた乃ては其の柄もあつた乃ては其

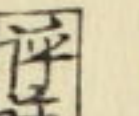
及

奥底をあらうて冬木の梢を 露川

小ちまきそ乃うくみのや 翁

初て翁よまて懇めるを存ての挨拶之さまを奥
庭前とちり果 裸木とて立其梢をすく中目
よりおをえ出てく付たり今先を園付と号し白
老の言を拘す只兼むおると立て揺する友之常人
あり何口あき相あれ陰わをあうよすさまを
えのし一ツ折る浮をえ出 小まきそを節せ
とらん枯木を塊をへるぬを隠し

「うくもまきそ短目のけ

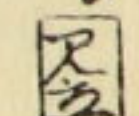
と已むお澄の心を遠らる牙柄之信今世人を多黙
すとて修位あり伽陀陀お比奥あれ彼をわて
けきくまて所を隠す時るこあす自よあひ
あるよあす只まきそ木の茂さをさるのこそ何令
翁焉といふも其傍其肘の奥あれ何の言卑と
あむむきを  我力を僅平しめ乃乃振るるは力

も君の懐の小去の温はそを為すとて揺くは何の
ぬえそや彼令露川を言去はし揺く揺辞をさる
おもせよれ方さる人の梳は助をこく君を懐か
かむも袒翁をさ侍さるる所存すまきそを其代
佛士直感へり只きをえて候を流す考いたそや

まよれい山又きり 里乃月 月草子

哥

石は流る考くくをあー 其二三

考は穿りよむ名人と神も向あるを山をを
付さる播人の只初て辺地へ入りと傍え口す振と
又立宿未めむと砧あるよたたり来つるよきさき
亦もえす伏家まさらあるらつこよ一歌をゆき
むと月乃月正勝を付たり是も 

世に捨られ 其の 初定

とせむい私之えより山言 只山のふりあるを已ま聲
能と引文て流る初てきれある故に翁ゆま
お為付を牙柄と早て戒るる

面白くお眺まう向の二系を添う大字にあり

刺をくくく扇の草茶尺取

山張や才を春ま玉爪畑 翁

及 石井の水うそく帷子 落摺

只実事之船を山の楳た古井あり更辺爪畑より

山の茂いと涼まよ才を春ま玉爪畑を春ま

指と立若昔は水取上てそくき持る涼きりきを

爪畑へてそく樹下の竹を付る

杖止くくく三伏乃比

とそく才柄おくうくおまいうちももはむ

花散 殊は若まき子母おぼは爪畑 翁

短きまきて杖乃日乃月 一泉

子母は雨き指より短日の竹を足おる

翠年あくくく椽乃夕月 只江之

翠一うき世孫山の山楳 翁

青消残る御根大根 白室

浮世の程を養むは菜根を咬て白身を寄す隠者
を裏む竹とて大根とそくう言いと楳の家願之

初乃去まきぬ隠者

と已の位を養れるとて酒をいあめきよはひも

付る何むるよ合む養れとそく隠むるまおを

付るトそく養まおを付るトそく椽竹あり

縁あり人を禁乃反扱ひ 翁

霞見 青きいちこそア布す椽のえ 翠枕

余市崎の挨拶之縁列の付り及終言を慰めむと

いつにおくくをまよて「司」ころ返さ椽のえまは

古事下「まよ」ま再くぬ書つらるまよまよ不

まよる草採乃の痕を足せくりわ白余市崎のさよ

あつ内を口き「まよ」途中の指を付るや加治之

「あつ」及の行さます 椽は自己

夷 茶採子何まの花を竹椽 翁

三秋乃竿を揚るく月 椽雪

コハ医防奇も在りや良薬あり何まのたは
を上り候も母とてく付たり

月を上げて又する夕月 只松

後 月代や採りまをおく宵の病 箱
二秋ふけとも聖り灯 正秀

草花二月をすり夜赤の葉をよせり白く六
月代のうらひも聖り灯は風流をそり

風さくくる極の下迄 只自之

井お月始の照ちまの心を遣す

さう候や候てちるまおち 箱

一秋志つまる 張笠乃葉 李由

日秋歩ぬ料敷のまもと青い夜は花を結て樹
下石上の記のす指を張笠のちもみちの文へ

荒くます此葉枯の原

と我月を作る布白の舞橋を矢をむ

多た 秋をねんのようにやに舞守 箱

あとりり ぶすも梅子の露 木音

史跡地まのよる葉おき又出て秋影の竹を付たり

あれ

とそく唐之の刃柄と成て在る余情とあす揚を
巴ら手柄をか句と与るおち平句の己ら力に促して
を玄曲て棄てるおあれは与奪の境天地をこ

田種とて目別ぬまきの没せれま

花故 旅衣早苗は包む食をむ ソラ
わくりの提草をすれ 箱

阪をむと後の提よりまきあまきとて夜提持
男の提持の葛藤をそめておすあといふ箱
是を夜言の格トスるあまきあまきを没ていふ件
は提の原を早苗とまきを相代てせれ早苗の
方より他より付る白体は 肩ユクとまき

後 冬さくもる小窓の煤 箱

たをせ尾兼畑の處は倍大根あるを足てしるを扱老い
尾は藤ありや新やと見ゆ句と足立て定閑れ
いふ際い足ておの兼畑大根畑のい足て拾を付
たり外まの句を内よて子詞と句老の志を 移
考り○押くくるおひ必きうめていづきよすの處
をくも山辺の古歌と足ては、移轉の法を考ねたる

拾 此乃を山をに句や冬をり 支考
青うて押く燐る炭を 後水

に句の中より一おを足あう今 押と号くお多福を
時、其の中の一を執てひきするに附句もあり

ワいき棚又する—— は私

三お 秋乃秋をけくは免むま 枕 脚豊
独熟材乃落る木の下 二川

葉松を一樹下と定柳の独居るをさくはと悉及て已も
独設する拾く悉已る氣の不自由を伴て

月 やくまきき木の葉戸 は私

信獅子尾

昔うとても頼む松あり木紫掻 木云

空よ小去乃山も眠りま 甚二

仮令木のををまうすとも木の下隈のあらおありは句
と足て又物を山隈と定山も降すすおれは席狼も
あうしとふんを付たりさを考あはを付して

雪うりゆりを足する 門先 は私

三月き未尽とまのん死に圍喰

紙衣まあらをれり去牡丹 木因

いびまいす寸秋乃あ草 巴卷

扱石必を床に上秋衣は定の風を序く許桂好の
件と足て同許おのあ葉を並たりキ角の句両葉のい
きを悟れねを人係は 因の一件は牡丹もあ葉も孩子圍
に降るむのいひきあうむは 因は下よは対句付く

志まおする草の戸乃まい

おと客より暖といをと夜法とをを妙といを

事付といふも當り人あり欠門ありさあむ花
よの揚そけ方の挨拶を魚肝油はかや一掃言
たふかわせよ世月そけ方お清あふを清言はり只
おいと芳ふのいふ婿答といえぬそもさる

え深の始おより高初舎を扣て

返考 系入や智羽の田植のうす中 卯七
うきと包む初茹十 去来

わむ尾舟より智舟上りてさぶらをまか舟子居り
笠懸連て来一はん事を揚志系入は河を去め
系より智羽の田植より成りおする振と腰骨一
更乃四の家を初初を足付ありと成る件を付る

わと

とき久持末たると成る件をそく系入と智羽の風情
を矢もむえより智羽もさぶら茹作て更乃久く不れい
さがまて婿といふもれもさる

清は十のさるるは居志

新きの海山あむむ家右系 イ松

は比秋のソリ 桑出寸 卯七

海山は家右の小作とさるい漢村とて新きまきい
り一級と布出する件を付る更乃さる付りて
望を解る病の杖さしは良松

備人をねせてあはる月振分 去来

返仕とて丁部一と 去来

浦人をねせてはお柄を腰骨一とさるいと喧く
返て浦人をねせては丁部の返仕とてあはる振

久くさるる人あはて

如月乃んもと付て振る系 浪化

きまふん一歳の海は若芝 厚お

白扇 人も枝も付てはあれぬ糸の糸とて更乃は其柄
を定て二月のりきとさる更乃おあはて

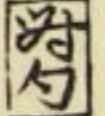
回あふ候乃 風も和くは良松

尾乃持出さるる

冬梅

滄梅乃ちまゝのまゝの中 歴元

雪は志あるの竹よりかき 丁牧

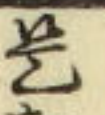
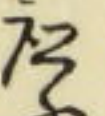
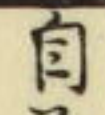
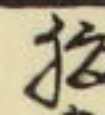
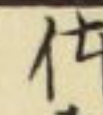
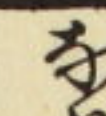
其秘古梅の件を同室の梅おとし  草作
の付て花もへちまの字眼く

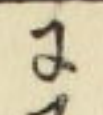
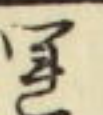
△主挨拶

山柄系まむ西行あふ杖乃言 雷枝

幽

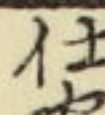
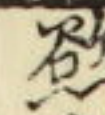
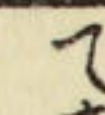
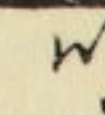
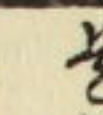
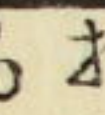
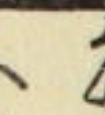
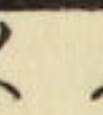
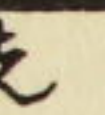
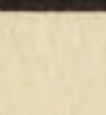
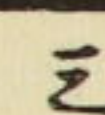
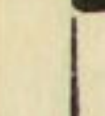













そせきと夜ふ風は破笠 翁

西行とあふ杖笠衣のお似たる次おを町立仄あふでも
夕れは定ふなる件とて風は乱くそをのせせ
ゆく傍の破笠頭てそををなす門定の件を付より笠
といふで西行は似る聲も執の志れぬ指もす
是を  と号し西行を向  を自向
自答するた之  お対河は 拙い必お対のわと定
扱して入るな之是を指の河より付  の破笠下容
件を恥する河竹も付  破笠二字を良きと  否之
あり忽お対とあむむさむ時も只る連出乃空泣の

まて西行とと替へ故い  己乃情の
言そわ句の姿をかきま  あく

花のさく男あふ花乃翁か 携延

秋は志あるはのころをれ 翁

仕友まむ禄のむきりあれとまを  捨棄
欲め  と物  を  只  の  せ
て  林  は  花
  系  を  人
  林  の  花
  社  の  花
  又  花
  人  の  花
  人  の 花
 昔 の 法 を 改 正 翁
 先 古 風 枕 忌 人 の 花
 秋 風
 山 花
 花

梅の香もあも別てびそのをよきつる竹もんで静かな
空の水は流上るる更をあきれきとどきこの庭を
わみて更板まつむる指を付る初字の春素り切
姿あれも未更のせつめ風情をえせ梅も夜と園色
うら園梅付てさるるまほ片白を人信ちて身
柄のあか付けぬあきも古人のまゆみあきそ

後格
おたさき梅の園枝をききせり 如行
古人のやうに 秋の風 月

純子の秋思を過て一秋化ちる更をむむも枝をき
うせて古人も梅もやせし秋の風乃寂をきりめむ
ひきとけしむる指を付るるまほ園と号しははあきふ
は情を起て死を信すむるあきし如行をきく
すはひあきすしと秋のあきしは梅あきし
園色を梅のあきくさるる私
おたさきの家病せり 枝板を 月家
ちり免てかきく風の志 月

我病せき其上枝を破て泣かぬはいつそ枝を
よ風の短わを絶せむとふんは時あきり園葉
まは各自の遠付片りさるるまほは法あきり
あぬあきさるるまほはま枝の板をのあきり
を清りわぬあき世を捨ちし信すむる人あ
そて旧契を信て自換々他し

後
葉種不可逆のそりや夕涼 曲翠
はあかきくあちさわの都 月

不白を狭き門先と見え涼しく庭木も也逆燈の
あきちるるも脚体もあきぬあきまわるる
狭りぬるあきとをばき流て外西く指を起し
実の涼風もあきぬあきを切ぬあきり
ま如樹と稱し園追打し附合の法をい
一 梅もこの名跡をり秋の枝を 小春
あきし月夜乃夜ききき 月
あきし月夜乃夜ききき 月

白砂清き池乃お露

と暮初き冬を初秋の病も病ふり柳と口を
時又握さるれむ乃柳を対するも人
い亦一人の獨するもわらわす

人さぶの病をけれり

木乃亦一田たえす木柳手 去来
夜一初号ふ久月のまれ 地を

木の本一初垂不用を月をを三す

おたよとめて

三お 浮や波う連くろ花と花 眉泉

池沼の岸と立水辺の着きせむと冬二初

い一園カレしを列す

漂泊乃身をたむす風 松之

草二初をとめて

乙名やあらの初も借居あり 丁牧

嵐色ある登り 友波

あらの初登りお松の嵐之とえ友一初その系を
よむくくう嵐之下ハしもの果の園也

園山丁えてあさる月 松之

子叙英徳の初葉乃使うか 麦士

馬くちのしりきる宿の 橘 唐元

時を多はし人の尾はし未る其園の初葉乃
使はし不特きてこの人の意ねさうの葉は是の時を
少する使とする高の梅は時言を付くう葉は六初
奈のはるん末う同き末あき未格ある時をむ梅
工あはうるむむ梅くうめは依えはし不特木の
格を作るは文中のまえる作をりて 号くうり

多くゆを付くう袖の風のみ松之

△餞別送別

捨心雪を煮乃やとり外 桐葉

三 菜一伝く子 是色中く 三初

亭き雪の中、空一ふの舎を流とする月拂の寂おき
みら一束のつらよは包てきて苦を清く密を合す
○評註 寫さるる風投入す條稿は是をむ吳梅の
りきを付くは只水之つらよは包むは元を以て
中の具して季考も出ず惟る雪をさひつらよを
是を去る者あむえより浮世の夢やのこある
をく泣せむもろくさるれに已下の圖ぬ

句妙 晴秋のなきあけ橋のつと 雪沾
丁を友持し風雪の月 三折

晴秋の哀ある如く大和路の床きよきをさる旅
あれい雪のきつゆをたあむとをさる西の志をさ
る途と又立渡る丁を命より丁を友ねよは生涯旅
より旅に接し風の中を身をさるむんてはは江戸より
大和を去る白く同家の次をさすは空はあつて

江戸橋の通すむ哉志くれ 拙子
三渡陸のおおし原る 月 三折

飯令橋らともや時自する波毎に位訓尾の棟の
橋は心通あむとり先をさる白くは白江戸は通ふ
は姿をさる空はたあむは橋の橋を時してさる
峠とる人の村れの及くは後向て空朧をさるて依り
古今の江戸は心通あむは橋の橋を時してさる
海をさるおとんはより

晴あけは澄借並む草乃尾 峯白
大橋の宋は作をつぐ人 三折

あまの宿をうらむのたぐりてさびをさるむと
いふあるを草尾は姿をさる炭もあき大橋をれい
は宋を焚て先人の作を継むとく人をさるるあ白
妻東あれは縁も来末の用あるを作をつぐ人トは乃よ
作て足立の作より又宋はたは橋木さる尾よ
あまの夜宿し是も炭とまはあまの姿をさるむ

白くは二拾をぬもあおの産 松和
一おわくくし尙一むれ 三折

めせとさうさう方角、恰の掃地並おせ対う事
秋のうきは鳥の声を匣て浦の寂を影しう

出
よた程は掃く草れよふく雪 木因
冬乃速として風も後くく

冬乃速として風も後くく
かまれよふく匣の運付く

笈
秋乃これゆく先この山占ふふ 木
之秋う掃やうう程ねやうう

乃先とる返て秋あふ山占ふふ
ねむとそく程うは併の運付く

栗
あふあふねば掃く山の雪 金見
杉の茂をより三日月 霜

林を運そあふと山上をさす併とるて甘ん
の杉乃のそ月を影を程をよりそ

空へは戸掃の掃く併で対方遠く
併之さうは古来はさの掃を足して

かす引く引く都の名残ふと
秋のうはたいいよくよま
のうく双方より鳴りあふ

小文
秋をまわすすめぬそ
又あひ枝危の空をこし

口きと進ぬきう上金の麦喰お人
さうあうう又あふ中の程は

といふんを其掃のお影危
掃くはは容併をて付さう

サル
梅若菜まうこの病のそわけ
ゆきおしきまふ 暖 乙お

只まうこの併をまき接人の社
笠おしきまふ 暖 乙お

初弁て古語の世を程う
才実あふあふ程は掃する

此所より勝手を更す時いひて君はたや
 んと作を礼とんは連き人ありかくて獨りあり
 以百子及秋冬の字を入ふおを何の句も月よ
 合て千集不朽の字とありむ定き公柄の誠を心
 する惜て乙多返也くおふふ 小枝
 ツツ 花世とくく山乃曲月 ソフ
 後を成すや 逸字を花蕪はけを惜てうま
 てとるる指を迷はれ花世乱ると花の姿を
 支世目と作てをうまの指をさてけと追力に
 ころ指さけり
 尾張とておふふ

拾 時をさくを西へうひりーく 如行
 為くもろくさくこれの芳 叶端
 只肘のめとふ空のりきと 屋あとお恥る指をけり
 入梅と空あぬやうの 空はハハ柄
 到力は成て也とちや何處山 柳笑
 布子裕乃あとい帷子 栞り
 ムツ

強力の為お指したるはさけり 羨分袖の通辞もて
 妻一おある、麻乃さ衣 八松之
 白扇 乃先も孫母き方そ秋と月 依化
 裕きうへくむもあくる 支考
 月秋の乃先の新ある中ははれきとむのあく
 をさて定もねとけあるおふふとあさる指くおの
 乃先の官心とれお似てコハ吹付く

八夕 舞立や扇は柄抄葉乃花 文采
 十内 面をきれも岑今と月々付 甚三
 所念をそそひとく葉 藤吹
 あふいおのふあし乃三秋 二
 三才の持せて葉の門出子 和什
 くり及中よ木鬼の枝 二
 足はれも其はきり月と葉 山只
 橋乃柳もちり去す小時 二

をききしは又送つて柿の木乃透て目障りき件と

三お 先陣は杖乃さくぬり青川 倚彦
髪も毛やう百合の花は 二

川辺の草花より先陣は老女老の唇を足せり髪
よ百合の志より実盛を挿し草花の曲く

風葉乃香を吹令ら新瑞々 溜竹
笠を木乃け涼む根 二

お向い分袖の心を只より寸素心酌草と足て
傍の木陰は核根笠扱も接人の体む件をさす

友 夏花乃咲るも鳥友之百理 二
宜う是乃関ちりあー 聖和

鳥友のさびに三百りの涙はひく鳥友杖より祠の
花さむむと夜ふい戸さぬ代を弄ふ根と夏花を
傷足らぬさ立打れも天を付言りを柳中より

東指 下ん文を付そと丁のお糸 子お
白 意うあつでめる春の杖 巴静

友 川とも静り友の情は厚 李仙
六月 白尾の唇を足出す 明 静

柳 也く笠をかき柳の風情を 花り
書角 おあつてうは鳥乃反防 静

かろお好あり九揃の柳古は同敷同件は句教多
送て一字二長は付分てさあふはあくものあー

△笛別

拾 牡丹志を深く送る情のおが 子お
お月涼一毛路の玉 洋 桐紫

跡傍乃牡丹とて玉津をよせ病まむの熱灸を
借借一う笛吹のつきまおの情を作らるる柄と

附 洛の去来を尋て其のあを情
白りり一寸風のをあう 秀丸 十丈
おひきくくも梅もこの月 去来

雑活喧くりんむさかセケと謝するんを席を吹か
ひり也く風を准一映之の句あを舟も也り返り付

とくりよき風の音を扱て仲冬に吹流す竹とて
襪をよも打はるは荒波をえせり一糸のあは荒磯
の掬付るをよも白く産つる程をえれり

三お

柔月や又あめとある日乞 廿二
そよりも今頃の秋そを 比誰
九月廿二はと帰宿しはふれと情の句あるは
姿を立又あめとある日を月夜と欺くそそのぢよ
りも川干る地のそを竹はふの園獨を付り
り帰宿の心を思ふあめ投書とあむ

病後癒せの心を

おつきはあまのりねや陽冬 二

少きあなひ乃ぢよとあめ 九博

老やと陽るよ光時と附て去りねとる曲言

馬まこみは十月乃とい

と病後を号る九博は速もは光時放るこむ

弄 二尺とい又あふ林乃おん 風草

おつきはあまのりねの月をえぬ。 柳玉

二尺は二月の初と容の目きをえとあめの姿をえり
り再会を号るあめの情とあめ

人まむの病をかえは私

△首途

旅人と我名呼まむ初にれ 三博

又山棠花を病しよ一と 由之

雁やとるささの山棠花は冬目の口きを合て陽るよ
風粒の姿をよも園の一件をえ送付る

我名よえむの句をゆて

たい人と我名呼まむ雪 知行

相慕ふ 盆きーうこひー 三博

我名よえむは相もてあめをえたき大盆と
奪胎一何宴のゆり教は付り

柔乃香は山路は誰一宿上 东花

哉 酌とり垂す松乃おん月 風乙

言は登る重九の宴とて松山崎の姿をきり

弄 理の花は千りのる乃そ途るか 風草
しもの月乃 狝るむ明 南仁

千りの乃も一歩より始るといふお出の件之

「竹」お草よりなをるもそちもは私之

△竹文

ウヤヤ 樹せよ移れす危乃友者 自准
秋を止めくる 垣のさし竹 羽

羽の羽を止るる句あるを只樹求る者と 園樹の
杉ま雀の啼をすり上よりク子ハクニと通ひ木の根
をより初そ赤玉は極をより最古云く

漸 いく落葉又は袖も後寸 扇兮
さしね乃 表を足す 膝 扇

皮は落すの肘もむねれと又袖も袖も後寸
只後さしはのここと突つて足する振の 有徳通之

射 風狂まも瘦てくりぬ風の杖 小枝

杖乃表をふるふ 葉乃ま 十丈
葉の山崎の表もやたる風狂の寂を待てる 有徳通之

土着まり子供や異は杖の風 何菱
皮のめれ 反故のふもね 丈

何を足てやまるとは物を振るは何菱は袖月元足
せむと皮は三尺さぬいおた出すとてまをさすか
えて作台と足立てく付るう 表おは杖風狂ま
ぬは情白の皆ケ振る者 表は葉おを候をさす之

「おもあ」月のさし 冬 其夜

ろ九は一 西風を一 表をよ入て

去麻 先とまれを如の雪乃一よきり 正徳
手作乃 石よりきり水 仙 魯九

泊るくきり二瓶をせてまは糸をむと水仙切るる
身乃乃容をきり水仙切る出する声の藤村
足えきり

竹文の不持除も表は居て

冬梅 掃よまは拾ふや 雪乃山一ツ 貞加

手水桶をい来て大樽を 産え
掃もせし狭き桶を足出 務く考き件を成り

△雑部

惣田の社久太被築池例て呈ぬさる彼雨は
種を強て小社の社を中は知し石を居て更神と
名のり草蔓心のみは生さる中へ心止り

三

志の子を枯く候ふ舎うか 翁
志をびふしる根你大根 相茶
社本を止る薬店の約草を枯く振る振る
更店を根你大根も其行はる志をひる寂を
又せりる志社久の志を志を舎字書くあむ

花を井田おの心詠茶を和て

商

系をてすく中堂や雪乃中 翁
子考志をくは候は月 業言
系中堂の乃をあうく又持く言は候の系をひる
り柳の姿とあうく系を扱のりとおまご成り

子をも乃社の砂る白砂は松

来つ可伸栗のうけは尾を猪り

かテ

屋家や目立ぬむを新乃栗 翁
柿は雲のときも花也州 栗抄
ち草の茂し屋家の姿を立柿字目立ぬ
付より室は世三味の中をあふり物く

葉根を喚して終る丈夫は後活す

幽

毛のくふ乃大根辛きゆくれ 翁
一通ゆく木くしの方 云席
大根相の通く大根の辛きゆくれと金理ゆく
用を付より何の巻をれりると引きるとあめ

乙おの二行を携り来りよ

及

草の戸や目考くこれ栗のは 翁
陽まよのすもあ桶乃月 乙お
草の戸は桶先までほむと又その上水桶は
投はくも栗をえて洗子よさう若あう桶の

月夕をえり草席の作を分り

白き二三三柳花後の名をよて

奈 其白柳より白くお仙花 翁

ふらつらやの並み房雪 白鳥

只柳水仙の白く園花飾をえ出て白く房雪と
ひらうせうり号を黄く由をいそく空後とありむ

草花は柳あり内ふき角嵐高きあり

未 其花は白く柳や草乃條 翁

翁は柳より條より花 以 嵐雪

花の柳花を眺つた花は花の二方子を並て草條
花のありを柳より行はる柳花を折行はる條を
折てさく折てさく折てさく折てさく折てさく
を折き上げて散る花を折てさく折てさく折てさく
折てさく折てさく折てさく折てさく折てさく
折てさく折てさく折てさく折てさく折てさく

古柳監の古実を清て

翁 月やその折果は日乃下西 翁

折人あきそわ折くくの冬 占ホ
折木花の折く旅人おの事さくは柳の一事をさく

柳の折花は折てさく折てさく折てさく

ヒナ 牡丹乃花をおむひろ庭 千川

柳花の折花は折てさく折てさく折てさく
折てさく折てさく折てさく折てさく折てさく
折てさく折てさく折てさく折てさく折てさく
折てさく折てさく折てさく折てさく折てさく

かき氏とてたまふ家名を待す

例 ひらくとはらるる柳や中乃峯 翁

まき葉ちちほく夕之のあと 母世

柳のまき葉のひらく夕の夕之は再なる柳の折
園備う山の作をよて青白のまきをさちつく折
の折を折りて復は折を音曲をさち折の折を

その女の標を折て

兼 白兼乃月よ立てるちち折 翁

そちちちあを折す折月 その

ちりあし身勝手花夜と^四掃除の仲き付うもみちり
お白の燈をよて同窓の極わこも一巻一詞と交し極
へきりのあし欠母の祀いりあし何をう作とま

荷子言うよて菊よきとえ

金葉 風乃さむけきよい糸を山 落楮
よき糸つくく雪乃又妻 二羽

そよ風いり日り止る振あれも懸倦あき糸をよ中
指を山のよき糸捲く雪足ふよてきよよはんは付る
産法よりのあれも掃へ故阜の尻糸を右より

手本様さる病よまら去はぬ

我ふ濟むむと格の旅定を居て

乃 雪一して足せをるあ田極者 己百
笠改めむ不彼のさうくれ 三羽

あ田極はす養とすよりあ母も物ききりあ雪
出さそいこあ人も笠改めむはんをを更裁る日
を衣を改むは古語を合て更裁る不彼と将一とさ

これと雪の二句をきく^四表^四海^四

終日風粧のまほを尽す

白羽 雪乃丸もく付す 梅茶 雁化
去れ日なきさ苔のまね 万子

其夜のりきく丸もをすはすきまこ花梨あぬきと
あんこり

自他物我の秋念

花記 世を足るま 栢榴乃中の扇か 高川
こ雪を教る月も日もさす 立枝

只はま栢榴ある葉尾のゆ放り世上を足る振と^四蓋^四て
かく付る栢榴のおまををさしとふ栢のぬこ

一日又の病快を尋ふ

花栢 秋と子風乃よまむ葉か キ角
葉よくすすむ内井戸の月 定良

あし入風の快き姿を五渡井の水取と竹を付る

萩考 空や秋夜を揺れ七多栢 角
月まゆやく五き乃 雪 赤吹

條終正会をすむる比之成仙の振は振せて忍やう

看痴の人を好し

和盜 龍乃末さきりか水の流る 縦昔

龍乃多人の心を只谷川の葉と

後柳舎の会す

後考 葉は教よまされても村子考 先放

初風の風士は加ふる挨拶あるを末きり得別松を

尚より振と

あはせむとして

フリ をし名のおもきと云つ 竹柱

只きりのほひの傳ふる振と

う人振る思ひをうつと

た日市を世生れをまきん

六行 又寸きれぬ松の暖や冬木立 赤燈

布白の仇世の葉とぬんあるを只あしと松と

鳥はをよきて屋上の松と定より

町ら良島は捨てらるる漢島の風友と信る

連夕や危もはひねの松とヤハ

一株竹のそぬる 郭 龜 仙昌

只浮危の白と

天満宮月次初会契

梅橋松をいふあり及此月 甚二

和候よ橋をのくも

小枝を名舞う行りて

三お 玉乃水徳丁そ古河のまきり 為松

△菰髪

菰記 むつりと刺て退れ又きー 高河
自後 おうがの菰ぬ草のち乃そね 独ト

情句之何をえてかくまむと隠さる姿を信んず
草あけのまね髪あれい白むと草のまねを説いて
句こころてかく付る菰髪はたとい川をさぐ
かきいおくや草乃まね句ははまき草のうとー

三お 利さる赤土塵六欲九月号 添と
袴まぬ力もきくぬ松 角呂

情句之何をえて九月号と云々と作者の語を採
えよま名刺の木葉ちり果し容と合ふる句れも
袴まぬ今もきくぬ松乃之乳あつと抱て世を捨て
男いあき物と思ふもは 夢さむむけも合さる抱とえて
赤木をりて其木を取る 息通合解の草件口ま

三新 花とれて友を心乃青あく一 玉之
自後 ひるねを洗さす夕立 温古

心の上赤き草の虫刺の下涼の快き振とえさう

他ウキ 面白くまきを後の 衣更 巳青

世白 橋仕きくを山おとくきた 八玉

白き世々の橋衣を捨て出せ方の山林は捨ふん

水月や不二の天意もあはれ 暮夜

一及乃松く 懐の好 友 隆五

不二の三條の松を射て表裡をそ尾いも世に

あぢきわや其十條の條仕也 乙去

風船もりんく 徒も常目 去松

十條を茶会と又路地の常目よむの隠きんをこり

自ウキ 十條く橋の麻も及さけぬ 竹叔

十白 凡の草忌も川 東々々 之

麻細の思き十條まきあつく抱く

ひる知いさるる草の草人 帆十

口ひて海は偏乃 明旋 之

夕立の痛の件もこら天意の草と文をいりまあ

△物宅賀年契

よき家や春春ふセ戸の粟 菊

蒜すくもる物きく州名 菊

大度成葉葉花お葉は古語取の白あを只家のはり
栗畑と[○]そこは蒜畑もあつた葉も候る件は候る

白痴 片断のあちをさくまは花 浪化

信すられて泣くは月 浪化

登の針を穿しきる指あふれし樹も候るま連不
多む恨まされて月も思はれは心の[○]問はて待さう

是れやお仙のちる花の新 化

庭乃柄も冬あう月 昌風

冬柳 蝶ちる家返りし冬牡丹 庭え

鳴きききき雪乃掃毛 六根

何れも只の白[○]は[○]同[○] 二色自存都も候あ

すて手契のち白よ

花をさす子さちり 燈

長根草よめはる生先

老葉ぬれくむきく乃乃

葉を杖うさす年乃取

や付付るち白えぬえう好もは柄のさく

△文書契

月身も柄もはし 柳花 浪化

まてう去えけう家の表 林記

柳取は花の柄とて我れと付さう余情世止

正風は海しきんえは只の白とて姿を立夜

ゆえをまむもあさるも白柄まうてあさく

二尺まえ豊後の不二を加うち 壺平

丁の辰乃空ま七文字 直支

二尺より不二を指さす件とて之を向うの空に為束る丁を

付さう七の[○]は[○]排れえ祖甚甚庵は碑[○]隠[○]の[○]隠[○]の[○]

三如 折弥すは唐の柄乃毛画え 平

友を處乃柄平一号 有保

後庭梅八十粒云云屢申し傳法の心を合さる祀ある
を只雪廊の梅や庭と見お祈りけり去の件と定て
此書術の松を對し号す梅を松とす

花も庭そひくく去の日
乃をすしき山志のあし
不易を仰ぐ松の月乃
依いかれす友あたりとも

公按手禮退自祝祖徳後業披愚ホの心りて
胸に季を分て梅を採する人あり而古俗を引て
其心をとくま或は其人思はる自今改めむ所は傳あり
と号し傳情もてしき言あむて風雅なれ祀を
を隆とせすと知て礼奉る人ま傳ま語く

△初会

あんなるにまゝ美るる美あは 翁
吹上りくくま乃高花 肯道
昔は約より美あ美の往來ふ大なる松と

新

出

入

種抄

日比去をきすに都のあうあ キ角
柳よりききき子の相乃実 文リ
手よりや赤巾のれい月夜 角
手お梅をたむふ氏中 介家
あゝ玉乃二又の身帯始 徳 益を
たまらほはれ 二うく月 去者
苦菜よ二多一 麦白田 乙由
おゝお 松子 松子 松子 杜若
列のあり 翁初る 森
手試る 雲の 雲

△納会

すし掃やられゆく痛の言 軒 翁
おこれて高れくる枯竹 山店
高果より竹垣竹箒も持法いひきに辨はる松
二又 皆物め二又の位をききこれ 翁
去の竹観ふすときこの風 出水

あつたすゝもく 柳鉄句 合連 髪あつたすゝもく 又小色
をまきも余雲之式の合ふに必余雲ありといふるより
あつたすゝもく 日余雲をあらわすに其の旨は任せて
指合せしむ曲言月をまきしむて他世は控ふて又
後日ある一俣の變化は肯なる事余雲のんじ之等
をまきしむ一俣の後僅一カ仙の策也も必余雲下略
として之を山女を白千夜も女をまきしむ九式の
志い子天は始て夕方と終れに夜は夕をまきしむ可あつむ
時、なき酒をまきしむ余雲まきしむ夕余の白とい
余顔之又女々余白の揺り各男も情を迷て

すゝき風をいふ、極先
子もろく花てどる不直

或は若草は縁部 或は月子とつらくあつたり
いらまき風芳うとて又まき白まきしむ下の扱を
らすや神の管ぬかす酒る余雲あれは極先も迷り
又くろ定奴よもすきしむ席上の白梅もまきあすや

△菊忌

白菊 云出すもりの仙乃定さきか 依化
えんま さらさらまきまねれお仙 夕兆

同日十五 一日を撮乃かすも志くれが 化
白菊をいふまきき奈乃花 林和

哉 手しやいふはる夜に初れ 支考
花は五ねうまきき奈 鳥伯

八考 声のこい枯せうあつたあま 可徳
まねてうそふ冬の氣死た 席丈

古俗は只たのち撮り同し徳武時さう困るゝ菊忌
あひ侍るま其地ま流皆 竹枝君拾香手向ま友
ホの河も揺せむとす白乃まきき追居よて白菊
其河原ま揺まかあつたあまあり菊忌の手は
あまする子あれいかわも余雲あつたあま古く揺り
あつて有あむと侍りて示せとも旧俗の扱はれ
その舞おとては流す依之時るの比教多作没て日

不白二女の差あるに揺る千すの妻さうむや各の
乃わらし句この容を付分てよと云はれ人始て
才柄細の何下通て初て付さる予を悟ぬ

△正復享保 有三有三手三保三ま三は三ス

東山
あれこそ橋を寫すすみふり 君仲
まう光をさるる去の日 白和

五
一長乃松の柳 一玉歩 花柳
人も花うはき山陰 思三

是亦不白二女 白和娘と云むはる妻字と對して
史をさふと不易推りの意を結うさるを末代
史和をわめて悲恨作碑 予は是余光乃の末
あはむむの女怪との揺るあて古人の心を結をやい
む不白二妻とあり只氣亂斗付ても女怪う
らむ常伴とさる句あり揺る氣情を泣之又を
も妻と偏固く作ても女怪ありよむ又お
まはれ只花を風月の朗詠も面白くむ佳中比

花供書梅扇会始う 理り 何思す

△追悼懐旧

百日を追悼とい一因長より昔懐旧と云う句乃
秋味女愁はよる九哀情の句揺る表は流て必
哀の詞を作むとする時に初て為情とす也る予も
あむその為乃の予も初てさる卑劣なるうと
只乃の指すはさる故毎に余情願て為さむ
さうとありし一信を乃の句はさる秋の揺
付るよりさるを秋ををえ連て五うとるおまじ
云非之凡仏のたよかるお秋之妻を死にかるお
のさるは中白牌のさる秋名は秋香燈のさる
としは振ある予あれを流句の傍に秋をさるの下
をさる懐古歎辞漫後ハ秋を秋をれい五よめて
もう一又形容のおまじ下を入す

花
おの花も母あきさるる冷き 三折
香防 砂るう 秋のそ 甲

秋後書

友ら名乃秋るやむの白だに 其二
机う声の千王 雪 湖夕

告雨書

十三秋の志ト兼も其余波 二
木のそりおの足おる長月 山リン

惜雨子

又実三ツ又梅の函に秋る 二
杖の園扇に詩あり詩あり 公家

东山

翁生高

おせをまも昔の下おる世系 哲夫
唯子の声よ三子の才子 二

梅も十三子の おふふ 千那

大柳のむもまき冬枯 角上

幻乃二むぐぐ 枯屋む 葉生

ちりくくとちけする空 宇申

け乃の伽葉のりきさう花 八十

ちもたも おるやう小 一州

三平

梅くま迷まぬ乃の波う糸 文州

辰飛高

一字の秋う。月も千金 二

梅は母文の熱う御も千金を荷て一字の秋言や

仿を仮て其書一划の古語を又うさる曲言

喚務の子をも。母や今の奥母 百王

湖あまの子の秋る月言 二

多

雪きや花もそちもうう候 彦平

臣弟

山も脈を是す 青。平 二

八多

雪や古翁風能のうらも 杉風

日

あゝ本の美まへや月の雪 ヤハ

大伴俊の雪もあけ三平とせ 冬陣

まきこいそをうさる松小 独

白扇

さう波や井波まかえる暮茶 支考

翁公家

世面の石もやく杖の風 信化

文星

梅くの秋秋るや古今抄 丁牧

甚三痺

てよと 漸る名のをを 比准

仿や天の星地は梅花 筑吹

こゆの枯えの返る風 控奥

梅の名や一月言て梅。仏 庵フ

唯子とらふ名もは時 百ア

又巻のふやばくあつて
 市席 加涼
 月とむとを惜む去のよ
 半裁
 丁のちも今んぼはてし
 糸
 柳う折く 凡の葉戸
 糸
 更子の泣思ふとや土草
 原
 ひろむとまきの一糸あぐ
 裁
 ちりらふあぐは張やる日お
 糸
 あももの光 あまはやく
 糸
 ちとをを急のあきと夜は
 一片
 せんどんのまよぬあきと月
 壁紙
 竹秋 月より更付床一 やく山 和菓
 依角牌 名のく壺中よりあきと葉のあき 十知
 位敷の白目くんとやあきと月 府那
 出いそてきまきと楮 糸
 骨や月あはぬと種の声 肉的
 骨をほ子の産つきまらう 賈那
 冬お祭 土人のくけくは角うを秋と云 ヤハ

障子うくくきんむのる 菅原
 初むらめさ下やりのく衣 笑詞
 や八牌 誰の子多刀ぬり杖 栲杖
 五古さうくんとそう年の花
 ちりくくくと下はあの花子 風之
 昔うぐをむ日あやちる栲 栲定
 ちあきほあはむ 暖 白川
 凡葉は作る追善の教多たれん秋の中にも白面
 軽く作す一旬毎くは栲河をさうり初て作おの根子
 是るる
 △送心立の追善
 送心を立て身長保徳をたすもはき句の根子
 同一を中比より栲起はハ 只今栲よりを起て
 娘むはんの名あをわけて起字より子細を付て
 栲起の送心を冥位と見て丈夫好て懐古高の心を
 付るるとうやうやもすも其心の栲にきけ句
 湘おの百代子大ぬを室あむ是も古風の栲定之

香根 喜もやりき 潤ふ月と栴 翁
十角 門のさしれー乃の古草 除風

古池や煙花てむおのき

雲のあぐり月の新 歌

時を声横くふやあの上

くまうまはー麦の赤く

花ももに吹くしおふら

山の丘方へ 独歩月 風

陰のせきうひあれまのま

松へとすこぼるよの中 舎屋

八号 暑くもろと合す おか 嵐言

先公衆 机の手燈へ返くる 指 ヤハ

十角 雑あくや菽の捨子の芝茂 仙化

紫抱の笠よ往來の笠 ハ

松島や霧まきせうれ時多 ソラ

月血抱とささくれの裏 ハ

雪やきと捨乃 二尺声 正秀

栴乃花へさくす立白 酒壺

三日月や号うろろ 藤 孫 イ抱

網のまありまお山の花 倆

我をよふ声や浮世の斤時百 ヤハ

花舞やほもの神楽地 まあ

みめ 穴夜中の心う揺や 追言志こをを素人の独

跡地を道をもつて時のまひを解る 伴と 園と

六花 初雪や水仙のもの 提む花 翁

共高 極うまさをあふふ 塚ま 水

十角 市人うろくをまふ 笠の雪

お乃 町を 紙衣大名 巴野

笠 身まより毛軍まよ 吉の山 甚二

十角 ちる名い 朽寸花をまよ 彦え

大友の乱美種の難大落末の伏おとあふよ吉舟の
哀よりもあぐりむ大花せわしし、我も今へ花に葉
のちる名よのく移ろく其山の説を付す

越 二上や高花化粧の玉千ヶ 陸白
妹よりゆく川子もあはく。 支考

或は梅は白々の名を結さるも又結さるもあり

後 春風や麦の中ゆく水の音 木守
牧田川 陽をいさむ花の糸口 三尾

越 卯の花乃初春候ぬ時より 老
卯花山 ひろさく空に新る花の 温古

或は名玉の隠るは梅は名玉を結する決にかし

因之は表お花の梅は何を付するは只梅限にておく

お花一色とするおははれ令なるは神尺意意なる

お木の意を合おるは白面を隠るは月あき討は梅は

女詞を付成するまをゆてさき容光倍倍乃

故之を比表おの梅を又さておはるは合ある付成

るよりとある人あり 過則勿得改

△頭發句 梅は秋意を梅はるあり
仲秋雨懐故人

北白 夕月や毎ふく月のまれば行 陸子
家も花のくくぬあけの音 三尾

梅注 八重うきく素良き梅はるあり 梅光
梅注 葉も小使うくぬ 三尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾
梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

梅注 花ももそえ口れ梅花 七尾

宗次郎 何とある宗次郎も哀し 杉風
別 己のそれ等を牛後とせよ。 杉
本白の送前の心まじき後あるを横首して宗次郎の飾の用
を出入哀字を深めうらむかむ規ありて平
白と世むを報揚の討方へ○ 徳島等の文より字をこ

△揚の容而ある事

小枝考 揚力カニカを余情を三けて討の手柄ある事
討手と柄をむす討手の中才一むすき而之始

平家九代

三々

いま子格松下ニ下リ

宗次郎日守之竹格子 辰巳
報の及失をえおす 去
報のなりをぬおす 去
報おかりをとり出た 去
いそしるも先付の去
あんと次するききよの凡
ハソコトキも持ぬ 去

コレヨリ

陸路揚とともおしあてふりよき
物とくみちや一く以内報の候のりよ
アはやとなくとうい男もろく

小ソコトキも持ぬ 去
いそしるも先付の去

辰巳略

と云村曰は去来いさうあき作をぬくる揚を
せむいいたやすうさき自の候はまろくさしてや報
のさきを求る報の事こそはれ報もややあ
拾遺されども報もやすや付むし報をすく
去の報さく低並山よりえりる 始
報を事と揚の付白才一のおと示ふ事小枝の詞を
去来を原よりけり何れもさりとて去り一依は
六揚を考ふる皆報のけりきこ言才もくも
おと思へ今人何れもさるユナキ

辰巳不換田はまろくはん
阿きの阿又むと舟さーりよ

夢

海をこえてるの声をうら白く
中よこちりをあふる盃 相慕

お白い海をこえてるの声をうら白く
中よこちりをあふる盃 相慕
未言わぬわらうら白くを声仄く白くと作る曲長
されは只透るるるの情を定法忘ぬえまろくか
との情の風情もて白子の姿を承す一きを古調を
あまお好し何れも通る方々未初入門そおの
改法をまぬかへおも亦良奥きとひ初対面
あれは時置し許されむは外も注化世まは教あり
されとも撰集とまきりて積りまふはふそは子
日附換の冬日よかくる方柄搦りもまきと又よは
某は又附の云換を皆承り子よ困又の甚葉あし
男院まの三方仙として修し様やわの翁の附し古調
の人も交れは清まらるる会釈もわむ今世の
一回の世もかて昔来の叙律をのよまへき附あれ

假令翁の許さるるも又まあじわぬ枝よ
され其附の二三子と矢草式を換すあはははと
乳よとの遠慮あすや法君子奏あひり

七星や極定ぬ山うつ

キ角

階は母子より法き草の朝 去来

は子の獨り子神もあきま山の伴恩のりきか
題向すふあらしをいれ何れは方柄を対々
そ晋子の矢草式をゆる人あれは分又お門下
面きよゆけあはる翁の改法はるまきよゆき
人わか古調は久しく刻深きよよお好い伝情
まて足るき故之在の法子よまむと言不爾
典君子所慚あれは帯と澄むへき矢草式

候くまぬ旅人もあし柳の花 廿三

木白のそ金と柳をまわす候を夜ふけのまよ柳をむ

まは白を柳林下の候店と移轉して立代入代

孫人の孫を討へむを御侮の思へおまお討て子
アと号も孫字の位をぬかたかた一字もあふ乃
容新後子王に孫才之の位よとて三お捨て
甚さる中中玉あり其名の陸障を輝す人
かうては其の服位を廢さる後多うりむ其等
一門を後下ア討てむと云す白も沫すすき
るあり九古の公家とくも白毎を重む持ぬ
本虫の叙別上竹もおと捨て世の位とする
才子の位も只跡をすむすよ乃上宮あるべき
福きり却て其所を辱むるに似てむ彼者子
の位も其の位を奪へりて其子に不孝と仰
みくる所以をも思合すへきるよとむ

因云梨店も是又男房秩又及未の草件又二句の
まぬ候も未の孫一も居あり爰もそと其の階証
よ出さむ仍令規きむよも孫の行方と信す
おかれまぬぬ孫の孫古く九孫一白の位

一たんも此のまきを初め平句よりも毎と信
連るぬも化ある事のみなり平句も是ま
よ始に季孫三百を二月より次は孫孫三百を
又二月より其次は草件三百を三月より孫
信句百を三月も成候あきむ初て千孫八
月の孫古く仍令付句に云下は徹候む人
も孫もおもはは後行地と信すむ限の取仏
裁社の境界もそむくことむ

□才三の事

本云才三の苗は文字の定より予二句の孫を白のやぬれ
とり下のぬぬ不てか句もあす決へ及すへきおこ
は理をきり付いも字も字も限すと云すされ
ともいひ才三の孫とる白の中におくも孫守は
よ才三の孫をきぬぬ付いも字も定より苗はる一
▲只は字も字も限ぬ理を知て自在とゆよとぬ
我い才三の作指をきされ定より苗もて所すとす

思そ假令て角まも才之件ありぬ句い必付世
きる之依を世や作と才之角寸と句を秘する
人あり大なるいふ之句字片句の終におく字は予
そ作意い必角ぬ指さかして作る事さう
世は句字通は付授ありて或は初稿付ありて或は
押字抱字のさくある事ありぬ人の推意を
▲古式の件之件言ふと通るは其は句字通十
三留より古法は句括依名通行信の時ハ才之句
字通よりある事あり古式もよくある人の
推意と評せられし事ありて其友也

連弁 垂我独吟

月ありし毛ありの句よりその空

更なる去の了る者

長呆ある波を松の舟

此は初稿十句

さす非のそくちやむの空の内

能をとおする 斬り 号

去の末天下は名ある時多

昔の連流たかれしより我家の他社より
辞通件は通何句流るは其成いあく只其たの
題は但て何角もせよとある事ありは其昔の
序説より出て句括辞通の時ハ才之必件字通と
定又其字通せむと上五字の終より字は字を
入替付して通は通とある事ありは其序後
いへ終を件を結ぶる句の終はする謂はは
附もまて字は其序何其の時ありは才之
ありしを二たを替して他字を許さるは句と
平句との境はけ才との句字よりある事あり
されし其たの角より欠きし事あり
▲才之限寸と通は通の句は其後句括して付よき
おくされし其たの角より欠きし事ありは其たの
類よりよく用ひし事あり

本意

幸さきの松は花より掛よて

は平句の序説を考へ付いおくと才之と平句との

文中「通」は「正格」及「余」の「通」は「除」て「変格」の
世長之安、子公名の申、合立は名に「種」いふは中、
救作あれども多急に「たれむ」と「尺五」と「葉」を「れ」
注句を考へて「自」知せよ、「ハ」平句を「作」せよ、「中」之

△尺五

拾 拾との「魚」の「心」も「存」せられ、海

「字」よ中

と「ふ」きを「揚」の「浦」の「境」に「対」し「英」は「比」し「亦」は「比」し

一 聖の「昇」も「秋」の「正」を「さ」きて、

「を」これい

尺五、子「を」名「不」の「ま」く「作」る「不」作「急」之

後、七「月」の「八」日「を」おの「ま」ひ「く」て、

「を」斤「付」て

飛「船」舟、救「子」の「水」あ「ら」う「も」留「束」て、行「六」

廿「九」日、
「を」清「き」水「の」
「か」と「す」ら

十「人」より「十」人「之」漢「字」抜「て」幽「玄」ふ「れ」も「世」に「月」
「は」時「を」志「す」同「く」と「あ」ら「う」社「口」を「り」れ「葉」

空「座」 下「新」の「運」は「一」部「思」く「知」知

廿「九」日「亦」の「あ」を「付」へ「き」お「急」字「を」抜「き」て「は」才

三「の」骨「お」ひ「急」字「を」是「字」解「く」は、

「は」地「に」

急、救「入」の「子」は「大名」の「秋」さ「き」て、 支「考」

「も」尺「五」

大名の「秋」は「急」を「り」て「た」る「た」る「あ」ら「う」く「降」る

衣「後」急「作」さ「あ」ら「う」急「の」子「と」是「寸」は「御」も

秋「大名」の「下」急「あ」ら「う」急「を」拾「は」位「を」付「て」

、 救「入」の「子」は「降」る「く」秋「候」て、

「わ」ち「の」束「て」

階「の」む「く」の「持」束「る」急「の」取「て」彼「は」不「河」に「秋」の「む」

を「は」急「り」と「い」ふ「降」る「寸」付「は」地「を」言「ハ」ハ

竹「音」の「ま」く「作」は「尺」付「て」な「め」り「ら」う「ら」う

西「花」 以「秋」を「言」遣「は」所「あ」ら「う」れ「て」

「考」よ「と」て

り「も」同「く」秋「を」解「ら」う「ら」う「を」困「ら」う「ら」う「と」急「あ」ら「う」急「之」

三匹

町並のまも一軒歯の抜て
乙由

山

茸物の後へり灯け被て
為由

ヤ

まわらうあわら橋の長宗まで
秋傍

奇

往りを板の火造にあてあて
た角

長良

二軒入の池まは橋をさまで
り和

柿

小豆系ちと足ね漬くして
三竹

村の空を流るときぬきて
防的

陣子のおと付も粒よかて
衆町

三お

国府賣芳の系と空よきて
有宗

今この生るみむの梢冬竹て
及及

小豆結より麻いを荷の意なり
兼彈

言木底のいおま白んぬさひて
字巻

遠くも松よ毛履の上よりて
固秋

千金のまをね木の葉まうて
立和

巨木やの門を掛よ出代て
李聖

了時。のさてきひきき牧の世よ
若

は灯の外よりまむ山よ
文孝

鈴をて出されころのうけりよ
支考

捨 △天竺工作言を自己より作意を付し何
子の貧儀更々眺りて 子相

「まろ——人ありて

夫天竺人の目より門より木儀も月夜を眺め
掃くもと自己の志を掃くも亦掃く

「門を人の掃くはかきし月をみて

「ねむるまの夜明て

其 雪を三つ陰より出——て 玉其

「の——それりて

三矣 村雪より月のきらむをえうて 伯志

「——史をさくれて

赤花 衝くく花拂い版に記されて 斜衆

「隔くく花より花拂の肌あて

赤云 蒼像をきこを鳴く未て 支彦

「——こ——あ——て

五衣 ちる時の花は花も枝も透れて

「ちる時——も——

笠 射の後にぬれぬりて門をせて

「——をきけ出て

哉 輪舟の二子を親より掃りて

「ふりきをの——似て

、 摺ちもけり杖をともふて 岳言

「——をむらむ

星月 去のゆく乃りあきと圓君て 治天

「——空をさきちの掃くむ

八月 秋風を中の中を吹かされて 宇中

「八月の月を吹かかく

山下 秋風を中の中を吹かされて 是通

「の——吹かて

フリ あのみ乃断をえと月出て 村女

「あ——あ——

後冬 下ん宿をささやいたる杖候て 卯七

「——の内を

秋風 存持く架より柱をけりて 杜菱

「を——の止めて

名匠

言うらむ日き有月の竹もきて 寄景

林外

中あふ秋もを 寄 寄つ 花つ

僧

やふ入の匣よりち 髪結て 履襦

云お

乙名の鼻をきき 只今うれて 杉支

よ

まをきあつく日あも 婿んよ 巴結

タリ

ひちりまの穴より 杖に 通うむ 物壺

思ふ

麻の角紐のちろく ち 房めむ 有栴

箱

井屋 竹ぬえ月い出さく 箱

冬

楳松 山家乃 竹を木のそさる ち五

用云

お衣

けりし 糸よ 又ぬい 糸出 牧壺

茗松

茗のせい 桑をのむ人を 履めて 有

松花

松花のうまきと 向うよ 花に 紫あつ 何とぞ

のむ

はれと 言われ 己も 皮骨を けりくと 有 ちまき

壬

一書 勢の末て ねる 松ありて

後旅

一と せの 仕り しまを さまりて

花故

日ぬき 笠を 並りて 涼し

美

夕合ふ 所より ねる 月あて

例

列目の けりて 伏む けりて

サレ 股引のねくぬく川越て凡非

をうけもあはす

考丸 悪意のねゆく流の定明て不玉

流の定明ると流の流りて

夕コ 羽箭の風やむ後、軸巻て指風

を候き扱

ひさ 引換、春に枇杷の斤方よてヤ水

をなひその斤、ヨリ換て

冬園 以春の幣とまる考うきて安伝

を考うきつるい止られて

五十 砂川よ考てすお空のやむきき 青山

をけ

後考 孫四の冷る札を押やりて支考

ねれ

考吟 やふ入の弛ま、門の萩候て

とせて

東西 後舟控よ足ゆる人待て

ヤ

雑 今をうて返さぬ考されて 僕石

うらとるもき

赤花 家根流のふ枝換るるもれて 菴に

るもきとこの扱て

ま出乃まてん欠よの文て 胤浪

よの文りい欠

反衣 出正のぬい袴一為袴急て 野古

おヤ

僧 花よ由く久まの替の考候て 之仲

自き替刺て

三お そまの二信流の甲をあてて 恙推

を

子達の夜考、工袴も替出て 亥致

何をお

あつる月も曲候い扱中よて 仙枝

五のちあす

帳子の下、裕の杖い束て 嵐音

二裕き

又皇 曙の中山の妻も只今うれて 童平
押も山も去の思

コハ ときの声も山風吹ユク 許六
—— 嵐も終

コト 神も春さひき杖の教あむ 山枝
おまろ杖は神の春さて

八号 菖蒲の中よりおや白む 又お
—— 時の空をえて

ミ 浦昔うおち杖の乃仏ミ ヤハ
—— いおの草を刈セウ

白見 春の後う入りておは二階 ぬ我
—— けも人も夜せて医る

△古語裁入并又法を作者何

十七 ひろくと蹄は膝の春さうて 菊
踏花言蹄香は清を春さうと奪拾換骨

—— 春は膝をりて花を履足——さふおこ
難 屋さえはへる雪の月をえて 菊

不美而富且貴於如浮雲 自他

白痴 自嘲する後杖を憐る 支考
社おの鏡形新自お流は手押写

西花 朝も何もあぬを——
古今 世とあぬ朝とあうてさへむううたや
お君も来さるむはう及新

三三 天つ風中も落忌の及行て 藤草
君を代天のそ衣柿は来ては身と抱さう

三六 天つ風中の通ぬのひきを供く
流新 誰やうう慮とをを流立て 秀小
おをい守とさるたふ出るとは身を合さう

雑 桃子とる花もお茶もさうさう 一松
浦の心古の杖のたれは身を採さう

你 山麓の星もめふさきさきや。 嵐
号もめふさ梅のむとよあふ山麓

雑 たつ年の改きそれいづけて 千角
 一 新衣を引きて ト玉
 東六 桑の葉に十玉添く川越て 大川
 小弓 京へゆく水苗代にせき止て 東野
 三お 松風の夜に夢をて立てて 一空
 僧 白中のをよる及上流急て 北山
 三頁 智を子と仮し玉の笛吹列て 唐之
 東花 丁の声に湖の傍乃ちうくく 伎房
 西花 笛をうたへ乃笛をこぼすくむ 支考
 あろ 夕暮を深おぬてうくくむ 冬文
 十七 去る子にうら子にまきおを 紹基
 六行 せえまのあら来る人もうさ ヤハ
 拾 菖波の弓の糸ちりを掃せで 采水
 花 雪を多く田にまわればあれや 珠石
 八巻 唐の仲いたる帆の 葵十
 三巻 雲抄 雲やハあせやんを首にたれハキヤニヨツテ

何しがとんふく又トお合の向を有ハ香ヤラと云
 ともある笛に用ふるハ大方キヤラのんこ片り
 紙 二不直に世中のね乃面白や 支考
 あやのねはねの類にひく又立自己天祐不用の
 三巻 三子にふい何部へ入るハハ教定の中より
 東巻 乃水はいとよしの園のるもあ 持サ
 八巻 三月はゆつこの秋の序もあ 又十
 白 新月 雲に草あふ山もあ 映翠
 雑 竹杖を夜に空をふの色 千川
 小弓 小弓守 枯葉のね乃加ふ 勝葉
 瓜 日本も 言巻 縁の 笛年 芳小
 了 決然とつけて先程のお借 琴耳
 翁 豆の付きまうつしの花燈 里小
 △上中七七
 担 けんと名をいふ竹のちめあて 三お
 東巻 雲の外の侍を隔る松として 雲田

ひさ ねひ人の乱きやくまされて 出雲
 若川 若川の字に西く夜更なりて 支考
 西条 ちかせて西にお野のりも来て
 白多 自家の犬使ふとんよはま未、
 之、 状ちんもいぬ使置る丁時て 甚二
 東花 くのちのせふー 鈴い月並えて 一付
 山中 こそあふ一石さういふて 落木
 ヤリ 胸をあふてこの村をて 夕市
 む播 こそこのさきらひより 桐川て 坐也
 之お 舟連えら振る布巾の平きて 落後
 竹秋 月打の出ぬる月もさきひて た假
 柳 ぬれぬの伝もあぬ麻竹て 有り
 、 去るのちのちて 野さきさきむ 南村
 赤巻 若川く連は 我をさきまらむ 及未
 若 一皮いねいせで 漆の賦りり 乙抄
 赤山 一夜いひうろと 雲て世く 月 木因

けり凡下おかーしてお付さう上中よ不用の用後
 を入るい序考さすーあふの山考の尾社中よ長
 き扱を独ねいひさ振の又さうさー必あくんは連
 てたぬ河をばる振ある作をさすすあうさ

△中七云

赤丸 さしお踊る急く布搦て 若
 你 宵の月さきわらあまあうて、
 若 極生れかーんあき角あうて 去未
 雲 とい人も一歩さつて草臥て 支考
 小支 裡をさふ山を後に去之れて 山店
 舟 かる附を極る附より田にぬれて 乙由
 僧 一ツあひ友を隣に布おりて 急川
 赤 よの中い初日この長来よて 二川
 友 君うよまあわちの白くわきて 玄芝
 橋山 鳥城 鈴は去のおとして 白妙 一り由
 白足 糸さうり鈴は去るをそとくちむ 山傳

八考 筭母玉は吸するちりも子 行る
豆影 蘇る時も旅の袖と麻衣 何声

△下五三

一 清糸出る溝の小草は杖立て 翁
伽 初月のうけ長樂はたぐして 若白
百鳥 長刀はお杖の多枝産味て 支考
西巻 天皇をもまきよはたなのうらとて
三お 情けのふいねはくは甘んて 花把
、 ころろと糊する考よ月をてて 九假
赤衣 小僧を地まの上は孫持て 高川
、 井戸掘りほのまされは笠扱て 兼浮
柀 献立も御考すれは月すして 出り
萱 田よりけりけりまのあてうらよ 相葉
花丸 人足の天皇算考もま風よ 去来
耐 乃其の目もくかきも 新考よ
八考 目代の及友地もき 為月よ 吹奏

サレ 新考考あししとる 月午よ ヤ水

サレ 又苗の月午よ 教並言 抄考はんよ 偽句を作つて

▲是意取こよめふ 新考も玄流もあつて 五ハ皆玄流
あるそ又下中上と及るすは 後月も亦文及も
きとあてあきすへ 九偽句の上中七の終り
後止考を入る物之候は 抄考考あししとる 月午よは
井八月午の抄考考あししとる 及り 教よる 抄
りき 菘月午よは 井八月午の抄りき 菘考よ
クイト及るは 五偽句ある のるき 木の正考 体云
と流く 辞あるもの 決して 慈考する 正考
考白 魁て 母衣衣考一 孫考考らむ 曇天
三お 孫考子よ 被よ 多よ 百子考 吾仲
十七 新考 給考 給考 考乃 七考 考 新水

□教苗考白の考よて 苗不苦

菘 菘苗の考白よ考よて 苗考考と人よ 考考れ
と考考れ 又考考り 考考 考考 考考 考考 考考

よて年固ふかよくたむかひあきよふに互あむよ
頼ふんのかきくつ分てよてあむよ

▲只秘虫要決の云く若より哉よ之この名目を
分たれども哉共皆歎辞よて用ふよ携つて
云より携つて二条之定まよ治定は主物に皆件
つきのかよそえおあー又よてい上のるを下
云え了辞あれい哉よ治指中決よて又よ之の
通ふれあー要決の指のさよあぬるたよ
彼治定ト云おさるふの徳よて明く

木の下のけも熱そさつてい 翁
明く来る人の物さるま 風麦
ばばをきする程の情よて 官本

夏夏の枯草をひる月りか 沾ホ
んちとくくよ附る白つりく ソき
春のるい人のあさる言せよて 沾粒
月い候りもさく三葉の山路が 司能

三千

初よくめをほもきをふ 草三
才にを定の市もさるよて 夏味

□ 三つ

合註 文章日録上の祝詞よ古より三つとさるるあ
三つ相合するんこ

▲三つのお祝言末より多き中よは説いと種はよ
三つ尋ねる句の口三つ引せよるあよる家上三
おの手柄あーたとい小春のきひくはるさる
只三つよ百句千句の信をさるもく 文始

▲又き趣向句作未降く力を入よとさるる世よ
云古くおきた合よ只三つよて勝さよる
あー若より人等の之おとて測ふさとも勝の
三つよかよいと姉あれい密よさるさるん

一 ぬけを考のふちらち刀の一葉切 長志
おつ矢の根よ流き杖凡 定松
冷きるいささる席よ似て 翁

コハ庭家の心し翁若てニおの格をきまひしる事
をまゝのあはと後よす

翁 仄不ニヤ廿月時ニマの根
花さくけもさうきしる 翁
層乃子孫や老い瓜の厚うて

コハ 去去や蜜屋止る神矢の根 許六
えほ 石 齧乃中一ニ 齧 木守

五組 斜り斗の田鞠のうけひて 糸袖
大合の水のひきやきそ始 り由

本妻ま田にや候しむ 六
侍ありの京此一字や平始 英逸

さくはぬらむ森才天類 由
平博の屯ユまきの花又えて 由

二初室や大人ある不ニの層 袖
車のみを飾る門松 徐才

完領おふけり端みのあまら 六

大福の奈い越あひ始し 才

花を為されむ平取の文 逸

翁曰考根の昔お若いのう世よる人を始候しき
勇作あつとれ風移る女まの子ワきく器

ハシキ 依の字ユ声あきほし玉の去 由
えほ 子くくうあす平月の時 袖

三内 石合若の跟の初も書候し 六

新山 老よりとも子苗とらるちの門 牛角
大平三岐 老のふ年ふき屋の下茂 又り

字長の名をともく家の月時て キ凡
涼海い木のらむ早乃老く 角

け木人ユまとも宗祇候しむ 角
昔菖蒲蓑ユきのの曇くか 角

歌の扱き杉葉うる声 角
橋井く松を糸ユとひねりて 角

山ノ下 傍於る志々松子の宿路也 又於
傍にあり 傍に松葉衣 涼ト
後 さまいあり 戸ノ月を言ふて 秀ハ

原 草のそけ親る吉と我の月
ト きれんあ言ふ初んすこ
小 白虎の玉社芝草を手にして

成 振舞も葉の襟や奈答髪
小 と言の月ノ初はわり
新 小 托く 新茶ニ依あしき

草馬松の園あり 文通上略

あゝと手皇儀や伴の初角力 栲裯
牙危い花ももこあ白楠 里和

山の丹松青の産原及あゝ
は才のあゝ人の中そむ人も志々人
いふま松は栲志こゝいんすに拒て

そけり 牙皮の向対仕る
十月廿九日 又新

志々平松

▲栲能楽松の宴と又立儀の又句をたへん
をこすきけ文通 壹平いり 答む

□六句表

冬 フいり見とつきあ半さく月あれ 百空

、 栲大いあゝ松葉乃松 力方

ア木城川下志々松を奉送て 予五

、 檢定う宮さやつす新嘉 卜必

。 白くこゝ陰をむ月のは 翁

たこちとすくは波草山 ヤ水

是表に地名を出し始之例三年化問は活は

□本式十句表

冬 表するい方句の大敷うて表に世とあや

るを始す但神祇のな句に神祇の栲杖懐意

木のな句もむと同一たのな句もあに神祇月

に哀花に秋赤を射の宜い合つて

フ松杉こすいよる 夷ふ 去来

、 う子面白う泣るたそれ 許六

神 ひさすらねちるおのてき風燈 翁
 ぞんおおりのちの内 ソウ
 吹えれて後の跡の月丸く 千那
 ア 橋を押してのちる初夕 未
 ・ソウ網をすゆききお離子 六
 あま笠舞のいり何れ 翁
 神△神の乃花う歌を完くせて ラ
 ハ 天をうれと地もたんち 那
 ▲表の本式の表は名不問守おあるをまゝ表おの
 はまあるれよま中よ系おと約さるのこあり
 付付方よ曲言せり
 三千△今日や名も花も泪の日 木因
 花きハ 夜もも乃電う追し 独
 ・大は車のはり又ま系うまきて
 + 起てあさりの山ちときん
 ・手拭う南大白く吹ておれ
 によろくとせん答でおお好

○いひきえて紙世り葉と目
 隠名ア ち末子のエチ少く声落るこ
 ・天、極楽の杖自をせて甚き二房
 ・四子程より五十カ仙を
 初て三お表おま曲言自ま毎篇むやうせし
 板令神尺意名不本を出すと付れの曲言か
 ていたの程とるよくよ表おとま号さうむ
 又系お二のちとも其信あるは怪し表おあるむ
 行志頂門上二隻眼を弄て必佛世の形お
 ぬれす祖との骨髭を透はすきりよむむ

△八句表

要は表に神祇あり尺意あり表を推寸名本さる
 人名さるより一連の始終を定よ約とらんあはし
 ▲上の文々日松杉表本を扱とせし八句表の始り
 是を表合は八句の記を表よ合寸といふんこ
 えよう表おれは月二出す定あれとも月と花と出

ともあつたむに菱格おれい花才之己下に出
 るもよ但月花もよハ白目まヤ奇又他キ
 なるそ異動他キの月出林キあきもあつた云う
 林之季共与流くもヨキそハ白季諸あも
 びて千妻万化人多何西花集本也集よせり
 西花ア相のそは後先におく船多 控夷
 ○ 内よねころふ方のらん目 何翌
 コ ア多形原もをやぬ博下林おれて 支考
 ・ ころの橋も風よ吹るし 世風
 砂川エた弘くも日乃光 砂角
 尺 茶所のを加たひ人ふつ 甲冷
 手ん改も名ふとて花の去 成也
 ハ 丁の陽る 砂高乃山 水依
 雀子海あの上も一胆あつた信去林支考は博う
 たひわて弁上と表へまう我よ諸百九表合ホ
 の他社を尋たの力仏百白と何をそ一表の内よ

一書の姿をよめて去猫もよは用すきることなり
 一辰面白くるとるぬ二子の辨先所書てはさるる
 るも又古束の法式や二子の発の樹よ合するは
 やと退るあよ古法所信よよいたよ及寸そ
 二巳の心氣あつた信む只一時の風像よさる
 あつた信式をむむ流る下先所お古法を破
 我式を定ふるの制を省きるといふめて白い
 秀逸多うむるを斗あふたよハ人一倍のい
 少もあつた人もあつた信も古実を結く寸身
 一破の言あつた今二子のそく法を定めむす
 三おより理を信て却て後人の言あつた
 信く先所の言を尋た考ふるべき事なり
 ▲去束はたをあら文様土の去て上木をハハ
 土子後各泳せ之其る字をそつてあつたあつた辰
 いさうら人の巳と邪えりて去束の系又を考むけ
 るおあつた甚甚後むもさる事あつた七劫彼心

深七は位ひくう海の去来ありきと奉るを疑
己東の之れを日表とあはするもあはれ
は松栢の表は自分立ちあはれ三子支障はあてず
あはるるも正古法防侍はうらひ正しけれす又ウヤヤ
愛は己の人の振るれ其文も去東の信之我きく
去東い言実の士結は三子とい美道の中何そ
ぬ女子の娘もて大乃を仰む持てお表お乃
るい許は支考の発めは箱の板にをひくもと
振麻はまの信後と交るれま甚くの能士空
は法格と授てさすい毎念の事くさうい只又信を
降とい子のそあはれなよとお表おの稽古す
時らと之流向も作の之法は力さゆるる百勿力仙
よりも即多たれい運て人人の持はあはむと只
まむ人のちよ修すくきさるよあむ

海印録一終

